

---

ふぁいと。

Liar-Double

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ふぁいと。

### 【Nコード】

N5864C

### 【作者名】

L i a r - D o u b l e

### 【あらすじ】

ずっといじめられっ子な昶。高校になっても駄目っ子と呼ばれ続けている彼だが、彼は父親の言いつけでいつも本気ではなかった。そんなある日【契約の日】になり、本当の自分を発揮することを許される。そして、本当の自分の力で彼が望むことは・・・

## 最初のふぁいと。

どんなに頑張ったって努力なんて認められないんだ。

何時だって皆距離を置いているんだ。

だから俺は

知らないところで今日まで努力してきた。

ある条件でその努力は契約の日まで発揮することが出来ないのだけ  
ど・・・。

俺はこの努力の結果でこの高校生活を変えてみたいと思ってる。

俺は水廻昶。

公立の総合学校の情報処理科一年生。

通称【駄目っ子】。

何やっても駄目だから、小学生の頃からずっとそう呼ばれ続けてきた。

まあ一応勉強は平均より少し高めだからその部分は補われているけど、運動は駄目駄目で、内気気味だから人間関係も駄目駄目。

見た目は・・・言われたことないから分からないけど。

「はぁ・・・疲れたな。」

部活なんか入ってないから俺はいつも通りに直帰するつもりで生徒ロッカーに指定靴を取りに向かって、上履きと靴を取り替えている時だった。

「よお、あ・き・ら・くくん！」

「！」

俺に話しかけてきたのは俺の学科で一番意地汚い男子生徒の田村将和だった。

「・・・な・・・に？」

「あのさー。俺今剣道部の練習で超忙しいわけよ？だ・か・ら♪俺

の代わりに掃除やってつてくれないかなあ？」

「・・・はい。」

俺は将和には逆らえない。

将和は一年で剣道部主将に成り上がるほどの実力者だし、断ったことが以前あったけど、その時は本気でボコボコにされた。

それに、剣道部の先輩に言いつけて先輩達と殴りに来る。

先輩達も俺のことが大嫌いなんだ。

それは俺がハーフだからだと思う。

地毛の髪の毛が茶色なのと、地の水色の瞳が気に食わないのだろうと思う。

「それじゃあ任せたよ！あ・き・ら♪」

ホウキを持たされて俺は再び三階の教室に押し戻された。

三階にあるのは、この学校が一階が三年、二階が二年、三階が一年という風になっているからだ。

卒業した先輩達の話によると後輩が先輩にあいさつをするようにこういう仕組みにしたんだという仮説があるらしい。

「・・・」

説明はそれくらいにして俺は居心地の悪い教室で掃除を始めた。視線が痛い。

だけど、長年のそれに耐えれば結構慣れてきて痛くもないのだけだ・・・。

「痛ッ！」

「あはははは！昶ちゃん何やってんのー？掃除？まるでお姉さま達にいじめられてるシンデレラみたいだねー♪」

クラスのいじめっ子達が投げってきたナイフが俺の頬を軽く傷をつけたらしい。

頬から赤い血が流れていた。

「・・・」

「何々？スルーなの？ひつどいなあ！！！」  
また色々投げてきた。

正直避けるのがもう面倒くさいから避けないんだ。

避けたら彼らは豹変して、さらにやるのが汚くなるから。

だから調子に乗らせとけばいいんだ。

何時の間にかいじめっ子達は帰ってしまっていて、教室に誰もいなくなっただ。

俺も掃除が終わって今度こそ帰ろうとして教室のドアを開けたら・・・。

「あっ・・・昶君」

「・・・・・」

何かよく知らない女子が動揺しながら立っていた。

「・・・何」

「あ、いや・・・その・・・すごい血出てるけど大丈夫？」

「・・・君には関係・・・ないよ。てか・・・俺といたほうがいいが・・・いい・・・よ。」

「え？」

「嫌われ・・・るよ？」

そう言うと、女子は黙ってずっと俺を見てた。

てか、何か用があったのか？

「・・・俺に・・・用はないん・・・だよ？帰るから・・・そこどいて。」

「え?! ちょっと待って! 手当て・・・——」

「いらないうってば!!!!」

ちよつと怒鳴って女子を黙らせた。

戸惑っているみたいだけど、俺は女子を無理矢理退かしてさっさと帰った。

(もう・・・なんなんだあの子は。)

翌日俺は、2限目から学校へ来た。

「昶! 一体今何限目だと思ってるんだ! 遅刻とは良い度胸だな!」  
「・・・」

嫌な感じの教師だな。

とか思いながら俺は黙っていた。

（我慢だ我慢。ここで俺が怒っちゃいけないんだ。契約の日になるまでは・・・本領を発揮しちゃいけないっていう約束なんだ。）

俺はとりあえず席について教科書を開いた。

そしていつものように消しゴムが飛んできたりする中でノートをとっている、突然教室のドアが開いた。

教室内の全員が突然のことで一斉にそっちへ顔を向けた。

「授業妨害失礼。28代目、居られますか？」

入ってきたのは黒いスーツをビシッと着込み、グラサンをかけたいかにもどっかの悪の組織のお兄さんだった。

そのお兄さんはゆっくりと俺に近づいてくる。

「・・・28代目。」

「・・・・・・・・・・」

あえての無視。

「28代目」

「昶、知り合いか？」

「先生授業を進めてください。」

「いや、でもその方お前に・・・——」

「早く進めろ。」

あ・・・やばい。

思わず素が出ちゃった。

生徒全員が俺の性格の変わりように驚いている。

うっ・・・くそ。俺としたことが。

「28代目水廻昶様。」

「~~~~~ッ！！何なんだ！何のようだ！つかなんでお前がここにいる！！！」

「突然で申し訳ございませんが、今日が契約の日なので急遽帰宅の用意をしてください。外で車を待機させておりますのでそのまま会場へ向かいます。」

「・・・あー・・・わかった。」

俺が教材片付けて教室から出ようとすると、罵声が飛んできた。

「おい待てよ昶！お前掃除しなきゃいけないんだから帰ること出来ないはずだぞ？それに俺からの了承が必要のはずだが？」

将和が笑いながらそう言うと、クラス全員が笑って俺を見た。

すると、俺の連れのスーツのお兄さんが将和の胸倉を掴みかかった。

「やめろ斉藤！！」

「しかし・・・」

「いいんだ。その手を離せ。命令だ。」

「・・・はい。」

しぶしぶ斉藤はその手を離した。

「それじゃあ今日は早退させてもらいます。」

俺がそう言い、教室から出ようとすると将和が俺を睨みながら

「デメエ・・・覚悟しとけよ。」

と、言い放った。

「・・・・・・」

でももう俺は今日、この後の家庭行事を終えたら、もう遠慮はしなくていいのだ。

「ああ、俺も楽しみに待ってる。」

俺はその時初めてクラスの前で不敵に笑って見せた。

ちょっとふぁいと。

学校をすっぽかして俺達が向かったのは街の外れにある廃墟ビル。外見は廃墟になったただのビルのようにしか見えないけれど、中はきちんと生活できるように綺麗してある。

つか、ここ・・・俺の家なんだけどね！

「本当に今日でおしまいかぁ・・・。」

「はい。今日でおしまいです。」

「なーんか・・・実感ないな。」

「まあ、教育も受けてきましたからねえ・・・さ、こちらへ。」

斉藤は俺を地下格納庫へ導いた。

昇降機で地下格納庫へ向かうと、広い部屋に出る。

そこには親父の部下が整列して待っていた。

その真ん中の空いている道を俺は真っ直ぐに進み、一番奥に立っている親父のところへ向かった。

親父は黒いスーツをビシッと着込み、オールバックにしていた。

なんかいつもよりカッコイイ。

「なんだ、制服のままで来たのか？」

「だっていきなり斉藤が呼び出しに来たしい・・・てか、別に放課後でもよくね？」

「いいや、今だ。俺は今日から遠方へ仕事に出るために夜の便で行くからな。」

「・・・さいですか。」

「さ、じゃあ面倒くさい賞状の文みたいなどはたるいから省略して・・・昶。お前を今日から【チタニウムバード28代目総長】に任命する。ここにいる部下は引継ぎ制で昶の部下だ。」

そう親父が言くと、チタニウムバードで代々引き継がれている証を渡された。

証っていつでも別に特攻服とかそんなんじゃない。



見た目は安物だけど、特殊合金で作られたシルバーリングだ。しかも、宝石もただのガラス玉のようだけど、ガラス玉なんかじゃない。

初代総長しか真実を知らないらしいけど、仮説によれば何かの核らしい。

しかし、この核は持ち主の身を守る能力を秘めていると言う。

まあ、俺は見たことないんだけどね。

ちなみにどんなに叩いたって、傷も入らないし、壊れないんだ。

俺はそれを受け取ると自分の指にはめた。

少々俺には不似合いかもしれないな。

「これでお前も正式にチタニウムバードのメンバーだ。本日よりお前は力を解放していい。

すまないな、今まで辛い思いをさせて。」

「いやいや大丈夫。電氣流されたり、飛んでくる刃物を避けたりするのに比べたら蚊が止まったようなものですよ。」

「ははは。違いはない。」

本当に短い式を終えて、この家庭行事は終了した。

ちなみにこの行事がなんだったのかというと、これはあるいみ『マフィア的な組織』の式。

俺のチームは先祖代々から世界中を駆け巡り、裏世界での不正行為を阻止することを目的として活動しているチームだ。

ま、悪いことをする組織じゃないのは確かなんだけどね。

でも俺はまだ高校にも行かないといけないから、日本でしばらくは活動かな？

海外任務は親父達任せよう。

「28代目。」

「ん？ああ、斉藤か。」

「はい。あの、28代目はこれからは本当の自分をさらけ出して学校に通われるのですか？それとも、このままいじめられっ子の役を演じ続けるのですか？」

ああ、それか。

別にどっちでもいいやあ・・・。

やられたときだけ皆いないところでそいつと話つければいいし。

「皆のいないところで話つけるおつもりでしょうが、それはお止めになられたほうが。」

「何お前俺の心読んでんのーッ?!」

「すみません。丸見えでした。でも、皆ビビりますよきっと。」

「何で?」

「28代目は黒いですから。特にキレた時の黒笑みが。」

あー・・・そういやそんなことを前に親父の部下（今は俺の部下）にして、部下が泣いてたな。

つか俺ってそんなに黒い?

「うーん・・・まあ、でも正当防衛な対処とはっきりした発言は構わないだろ?」

「まあ、それは構わないと。」

「じゃあそうするー。」

俺はその日、それだけ斉藤に言うのと地下格納庫から姿を消した。

そして次の日はいつも通りに学校へ登校した。

教室に行くと、俺の机の上にどっかりと将和が座っていた。

「よお。おはよーあ・き・ら・君♪」

「うん。おはよ。とりあえず邪魔だからどけよ。」

「ハア? 昶君何その態度。いつもの駄目っ子昶君の態度じゃないねー? やっぱバックに昨日のお兄ちゃんがついてるから?」

将和はキレながら、ついでに顔を引きつらせて俺の方へやってきた。つか、斉藤のこと言ってんだろうけど、斉藤は俺より弱いぞ。

「俺はバックなんて頼らないよ、将和君。」

「将和さんだろ? 何君付けにしてんだ?」

「面倒だから。つか、タメなのになんとか様はおかしいだろ。違和

感ありすぎ。」

「言わせておけば・・・昶、覚悟は出来てんだろうな？」

俺はその言葉に頷きもせず、にっこり笑ってみせた。

内心、『こいつマジウゼー（´A、`）』とか思ってたんだけど。そしたらまあ・・・不良って嫌だね。

いきなり腹に入れてきたよ。

それに続くように顔を連続、更に腹を椅子でガンガン殴る。

「これにこりたら、もう俺に逆らってんじゃ・・・！！！」

将和の言葉が止まって、傍観側のクラスメイトが将和の方へ食い入るように顔を向けた。

何故か将和は口が開いたまま目を見開いて固まっている。

後ろにいる舎弟である将和の友達も固まっている。

「逆らったら何？」

彼らが固まってしまったのは、俺が微笑みながら殺気をだしているからだ。

いつも彼らが見ていた俺の目つきは弱虫そうな目だったが、今の俺の目は明らかに彼らを睨んでいる。

「何かって聞いてんだ。答えろ。」

「くっ・・・コイツ！！！」

殴りかかってきた将和の腕を俺は瞬間的に掴んで、将和を宙で一回転させて床に叩きつけてやった。

てかこいつ、本当に口先だけだ。

力なんて全くないし。

「舎弟の快斗君、蘭君。君達も将和君みたいになりたい？」

限界に等しいほどの満面笑みでそう言うと、二人は凄い勢いで首を横に振った。

まあ俺としてもそれが超助かる。

面倒なことは一番大嫌いなんだ。

それからすぐ朝のHRが始まった。

## 風紀のふぁいと。

朝のHR。

俺は何事もなかったようにいつもどおりの【駄目っ子】の役を演じ猫を被った。

「えー・・・お前らよく聞け。今日の球技大会は学科ごとでの男女対決だ。女子はバレー。男子は野球とバスケ。きちんと会場に行けよ！それから・・・昶。お前には風紀委員からお呼び出しが来てるぞ。」

「え？」

「鬼の風紀委員長って言えばわかるな？あいつがお前を呼んでる。今日の球技はお前はしなくていいから兎に角会議室に来るようにと言っている。」

「えー・・・（；；）」

見たことはないんだけど嫌なんだよなあ。なんか。

HRが終わってから俺はしぶしぶ会議室へむかった。

「失礼します」

俺は会議室のドアを開けた。

するとさ・・・奥の方に偉そうにふんぞり返ってる人がいるのよ。

頭はそう・・・まるで・・・『パイナポー』

「・・・パイナポー！！！！」

「君、いきなり失礼なことを言うね？」

「はっ！！すす・・・スミマセン。」

「ふっ・・・まあいいや。君おもしろいね。」

あーこの人綺麗な顔立ちしてる。

きつと女子からかなりモテモテなんだろうなあ。

「水廻昶君だったね？」

「はい。」

「僕は神崎瞑<sup>かんざきめい</sup>。気軽に瞑って呼んでよ。」

神崎さんがそう名乗ると、俺を手招きした。

そっちへ寄っていくと神崎さんは俺にワッペンを渡してきた。

「……え？」

「あ、君強制的に風紀委員だから。まあ、斉藤さんから言われてるものもあるんだけど、

知り合いのチームだからね。」

「え……まさかパイナ……ゲフンゲフン。神崎さんも？」

「うん。そう。」

そう言って神崎さんは俺にチームの証を見せた。

俺のものとまたちよつと違う。

シルバーリングに紫色の核が埋め込まれている。

それを確認して俺が指輪をはめている手を神崎さんに見せた。

神崎さんは「ほらね」といい、笑った。

「でも何で斉藤が……」

「28代目に昇任したばかりだしね。これから狙われる可能性もあるかもしれないから一応俺と一緒にいるようにってさ。」

「そっかあ。ところで神崎さんのチームって何処？俺知らないんだけど。」

「トワイライト。主にオーストラリアで活動してるんだ。」

やっべ。

すげえ分らない。

「……」

「分かってないだろ君。」

「ハイ……キイテマセンデシタ。」

「某CM風に答えるなよ。」

半ば呆れられている。

まあ俺も少々活動してなかったから仕方ないっちゃ仕方ない部分もあるんだけど。

「そういえば君は特殊な育成をされていたらしいからね、まずは君

の力を見せてもらおうか。」

「いやー特殊っていつでも毎日家に帰ると色々なトラップが発動して中々リビングにたどり着けないだけなんだけど。」

「まあとりあえず屋上おいで。そこで僕と戦おう。」

そういわれて俺達は球技大会で誰もいない校舎を上がっていった。

## 風紀のふぁいと。 2

屋上に出るとグラウンドで学科ごとに対抗試合をやっているのがよく見える。

「つか、俺達こんなことしてていいんだろうか？」

「・・・多分いいよな。つか、球技大会とかたまりい。」

「さて、じゃあ昶君。始めようか。」

「始めようって言われても・・・俺丸腰・・・。」

神崎さんは既に鉄パイプを握り締めている。

とりあえず俺は辺りにあるものを探してみる。

「あ」

何故か隅っこの方にボロボロになった竹刀が置いてある。

まあ丸腰よりましか。

「昶君。まさかそんなので僕に挑むの？」

「・・・だって何にもないし。いいよこれで。」

俺がそう言うのと神崎さんは笑った。

（おもしろい奴だ。水廻昶。）

「いくよ！」

神崎さんの声と同時に俺達の球技大会の代わりのチャンバラ大会は始まった。

鉄パイプはいい音をたて、空気を切り裂く。

（中々早い動きをするな・・・神崎さん。でも・・・決定的な欠陥がある。）

振り下ろされた鉄パイプを軽く避けて俺はフェンスの上に立つ。

「何故攻撃しないんだ？」

「だって、こんな竹刀じゃ攻撃したってダメージないっしょ。」

俺はそういうボロボロな竹刀を見せて笑ってやる。

神崎さんは不思議そうに俺を見てるけど、何か考えてる。

目つきが先ほどより鋭い。

「本気で行かせてもらおうよ、昶君！」

「どうぞ」

ヒュッ・・・！！

「うっわぁ・・・マジかよ・・・。」

俺は神崎さんの攻撃を避けたけど、あれは避けなかったらやばかっただろうな。

フェンスが俺のいた部分付近は全て押し潰されている。

潰された音に気がついたのか、グラウンドの方の生徒達がこちらを見ている。

「あーらら・・・。生徒が気がついちゃったみたいですね。」

「そんなことはどうでもいい。今は闘っているんだ。」

・・・この人頭ラリッてんのかな。もの凄く楽しそう。

「身体能力・・・なかなかいいものじゃないか。気に入った・・・君は僕が倒す！」

「ええ?!」

倒されても困る！

俺まだまだこれから世界に出てやることいっぱいあるのに。

流石に高校生活の中で生徒同士の殴り合いで死にました。なんてことにはなりたくない！

「いやいやいや落ち着こうよ神崎さん。」

「君は僕の獲物だ。僕のものだ。」

あれ・・・これって裏発言？

俺まだそっち系の世界には行きたくないかな。

てかまあ、ご自由にどうぞって感じなんだけど、俺を巻き込むなって感じ？

うん、いいよ。別に存在の否定まではしないから。

でも俺を巻き込むな！

「・・・ごめん。俺そっちの世界には行きたくないんだ。」



「何を言っている！君も僕と同じ世界（チームの話）にいるじゃないか！」

「Σ（・∀・——）ゲッ！！そ・・・そうだったの？！（裏世界と勘違い）」

親父・・・チームってそんな場所だったの？

俺一言も聞いてないよ？

何かスゲー嫌になった。

俺が床とお友達状態でがつくりしていると、神崎さんは俺に向かって鉄パイプを振り下ろそうとしていた。

バシッ！

「！！」

神崎さんは驚いた顔をして固まっていた。

「・・・昶くん。君、今何したの？」

うんそりゃそうだ。

何の変哲もない、今にも壊れそうな竹刀で鉄パイプを吹き飛ばせるはずがないもんね。

「答えろ！」

「うわわわ！こ、答えるからそんなに近づかないで！無意味に顔近いから！」

とりあえず神崎さんを離してから俺は説明した。

「つまり”気”だよ。気。」

「気？」

「体内にある気を増減させることによって色々な力に変えることが出来るんだよ。よく中国のなんか体術的な話の時おじいちゃんが『気』がどうこう言ってるアレ。俺はその『気』をただ大きくして竹刀に力与えて弾き返しただけ。」

俺がそう説明すると、神崎さんは「うーん・・・」と呻りながら考えている。

（気の力を操るといふのか・・・確かに人間には気があるというけど大抵の人間は放出しっぱなしで言うし・・・それを操れるのは通常の訓練よりかなり修行した者だけっていうしな。となると、水廻昶・・・彼はかなりの訓練を受けてきているというわけだな。）

「なるほど。理解した。水廻昶、君はなかなかできるようだね。」

「え？あ・・・どうも。」

神崎は昶と軽い握手を交わして戦闘終了を告げた。

そして昶は授業をサボるといい、図書館へ向かった。

昶の後姿を見送った後、屋上には神崎の姿だけが残った。

「・・・最後の鉄パイプを弾き返す時の彼の瞳は・・・まさに鬼のような瞳だったな。」

鋭い眼光で神崎を捕らえ

隙と無駄のない動きで素早く横へ回り込み

竹刀で鉄パイプを弾き飛ばす

そして最後に僕に向けられたその瞳は

まさに獲物を捕らえた獣のような瞳だった

あのままやりあっていたら

多分僕は殺されかねないな

「斉藤、なんで僕なんかにかかせるの？断然彼の方が僕より遥かに強いじゃないか。僕が傍にいる必要なんてないよ。」

そう言うと、斉藤が屋上に設置されているタンクの後ろから姿を現した。

「28代目ならお前がピンチな時守ってくれるだろう。それに、お互い組織が違えども助け合いの精神があるほうがいいだろう？」

「組織貿易かい？」

「そうだな。組織貿易だろうな。鎖国はいかん鎖国は。」

そう言って斉藤はケラケラ笑っている。

それを見て神崎はため息しか出ないようだ。

「わかった。そうだね、助け合い精神が大切って小学校の時先生が

よく言ってたよね。

『1人は皆のために、皆は1人のために』って。ぶっちゃけくだらねえスローガンだけど。」

「俺は先生なんて嫌いだ。」

おまけ。

「ねえねえ昶君、聞いてもいいかな？」

会議室で風紀の仕事をしている時、神崎と一緒に仕事をしている昶に突然問いかけた。

「何？」

「斉藤ってさ・・・」

「うん。」

「・・・元不良？」

思い切って問いかけると、昶の動きがピタッと止まった。

そして何故か神崎のいない方向を向いてしまった。

「・・・」

「おい・・・」

焦りと困った笑いと、完全に目をそらしている行動から完全に予測はつくのだが・・・

決して昶は口を開こうとはしない

「も・・・黙秘権発動」

「するなよ」

確信。斉藤は絶対青春時代は不良だった・・・と。

## 輪廻とふぁいと。

学校の授業に飽きてきた俺は、教科書でバリアを作りながら携帯をいじっていた。

なぜか、クラスの違うはずの瞋さんもいたりする。  
しかもちゃっかり俺の隣なんだ。

やっぱりこいつ・・・ソウイウ系の人種なのかな。  
正直言って巻き込まれたくはないのだけれど・・・。

「昶君、ちょっとおもしろいことしよーよ。」

いきなり瞋さんが口を開いてきて俺はビビッたんだけど、おもしろいこととは何なのか。

気を引かれて聞いてみた。

「おもしろいこと？」

「放課後にいいかな？」

「え？ああ・・・はい。」

どどどどどどうしよう・・・帰り道にピンク色の世界に引きずり込まれちゃうのだろうか。

いやいやいやいやそんなことはまさかねまさか・・・。

いや、でも安心してはいけない。もしこの人が本当にソッチ系なら安心していたら引きずり込まれて俺の薔薇色人生設計に支障が・・・。

うあああああ・・・

そんなこんなで放課後。

瞋さんに連れてこられたのは情報処理室。

今日は情報処理部もワープロ部も活動をしていないみたいで、誰も居なかった。

俺達は、勝手に情報処理室（以下、処理室。）に入ってパソコンの電源を入れた。

「瞑さん、何するんだ？」

「ふふふ。君好みの戯れをやろうと。」

「戯れ？」

「これを見てごらん。昶君。」

そうやって瞑さんが俺に見せたのは、インターネット上にあるひとつの掲示板だった。

一体この掲示板の何が戯れられるというのだろうか・・・。

「瞑さん、なんなんだ？よくわからないぜ。」

「この掲示板の内容をよくよんでごらん。以前の器を隠していた君と同じさ。」

「はぁ？」

俺は掲示板の内容をスクロールしてじっくり見ていった。

その掲示板には、明らかに悪口や、死ねばいいなどの言葉が並べられていた。

ある一人の女子生徒に対して。

『長谷川輪廻』

「この掲示板のタイトルが俺達の学校の名前の省略で記載されているから、この掲示板に書き込みをしている相手とされている相手は俺達の学校の生徒ってことだよな。」

「ああ。違うないね。」

「許せないな・・・。」

「どうする？君ならもちろん見逃すことはできないはずだけど。」

「当たり前だろ。」

俺は女子生徒の名前と、クラスを生徒手帳にメモを取ると、さっさと処理室からでていって調べに向かった。

長谷川輪廻・・・1の3の28番。

一体どんな子なのだろう。

俺は、3組の男子生徒にクラス写真（まあ、生徒証に張ってる個人

写真全員分）を見せてもらった。

（28番、長谷川輪廻・・・輪廻・・・この子か。）

長谷川輪廻。彼女の写真を見つけたが、いたって普通の子高生。肥ってるわけでもないし、気持ち悪い顔をしているとかそんなわけでもない。

（あれ・・・この子何処かで・・・。）

『あっ・・・昶君』

『・・・』

『・・・何』

『あ、いや・・・その・・・すごい血出てるけど大丈夫？』

『・・・君には関係・・・ないよ。てか・・・俺とないほうが・・・いい・・・よ。』

『え？』

『嫌われ・・・るよ？』

『・・・俺に・・・用はないん・・・だよ？帰るから・・・そこどいて。』

『え？！ちょっと待って！手当て・・・――』

そうだ・・・あの日、俺がまだ内気な生徒の役演じてた時に俺に話しかけてきた女の子だ。

俺もちよつとイライラしてたからあの日、無視しちゃったんだよな・・・。

謝らなくちゃ・・・。

そう思っていると丁度長谷川輪廻が教室に戻ってきた。職員室にも行っていたのだろう。

「長谷川さん、ちよつといいかな？」

「え？ああ・・・いいよ？」

丁度放課後だったので、俺は長谷川輪廻を連れて、近場のカフェに向かった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5864c/>

---

ふぁいと。

2010年10月26日15時19分発行